

新幹線考

旅立ちのころに想うおも

「玉手箱」。誰でも一度は耳にした言葉であり、何とも夢のある箱です。

「指宿のたまたま箱（通称・いぶたま）」という名の観光特急列車が走り、その列車の乗客に向かって手を振る子どもや大人がいます。その様子がテレビ番組で全国放映され、心温まる光景が出演者の共感を得ました。

先日、「いぶたま」を乗り継いで新幹線で博多に行ってきました。鹿児島ー大阪間がその昔、寝台特急「なは」で約14時間を要していたものが、現在では最短で4時間足らず。鹿児島ー博多間を走っていた以前の特急列車とほぼ同じ時間であることを考えると、その速さに驚かされます。

さて、この春も多くの若者が新社会人として巣立ちます。「西鹿児島駅」のころ、就職列車がホームを離れる風景が妙に懐かしく、切なく思えます。鹿児島中央駅のホームに立つと、五色のテープを強く握り締め、「体を大切にしろよ」、



時間的距離を縮める新幹線

「元気でね」、「手紙を書けよ」の言葉が飛び交う別れの光景が目に見えなくなります。

旅立ちの風景は変わりませんが、不安や緊張感を持ちながら故郷を離れる若者への熱き思いは、今も変わることはありません。苦しさに負けない気概だけは、忘れないでほしいものです。

苦しいことだってあるさ
人間だもの
迷うときだってあるさ
凡夫だもの
あやまちだってあるよ
おれだもの

相田みつをさんの言葉を贈り、旅立つ若者へのエールとしたいと思います。

指宿市長 豊留悦男